博士学位論文（東京外国語大学）

Doctoral Thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

氏　　名	白　双竜
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲第 336 号
学位授与の日付	2022 年 11 月 30 日
学位授与大学	東京外国語大学
博士学位論文題目	内モンゴルにおける民族教科書に関する研究 ―教科書の教育的な役割と文化的な多様性に着目して―

Name	BAI　SHUANGLONG
Name of Degree	Doctor of Philosophy (Humanities)
Degree Number	Ko-no.336
Date	November 30、2022
Grantor	Tokyo University of Foreign Studies, JAPAN
Title of Doctoral Thesis	A Study on Ethnic Textbooks in Inner Mongolia －Focusing on the Educational Role of Textbooks and Cultural Diversity－

内モンゴルにおける民族教科書に関する研究
―教科書の教育的な役割と文化的な多様性に着目して―

【要旨】

本論は内モンゴルにおける民族学校用教科書の記述内容の現状と変遷、およびその教育的な役割について分析と考察を行った。民族学校における教科書の記述内容について比較分析を行い、人間形成の基礎を養うべき義務教育段階用、教科書内容に込められた教育的な役割を調査、分析することを試みた。この一連の調査と分析によって、民族教科書自体が本来有すべき地域的で民族的な個性とはどのようなものであるべきかを探求した。そして、民族教科書が、地域性を保持しながらも多文化社会構築への貢献、ひいてはグローバル化社会や国際化における文化の多様性に対応できるような、児童生徒たちの知力を育成する基盤となる方向性を検討した。よって本研究は民族教科書編纂による今後の課題までを射程に入れた研究である。

本論では、まず、内モンゴルにおける年代別の民族教科書の比較分析を通じて、民族教科書による記述内容の変遷を明確化する。次に、民族教育におけるマイノリティ教育、ナショナル教育、そして異文化教育、多文化教育をめぐる教育的、文化的な役割について考察し、民族教科書の編纂に関する今後の課題を提示する。この作業の進め方としては、民族学校における義務教育段階用の「モンゴル語教科書」を中心に、「モンゴル語教科書」、当該の「教員用参考書」（教員用指導要領とも称す）、および「モンゴル語課程標準」の、3 項目を分析することによって、近年の中央教育部における民族学校に対する教科書改革による「モンゴル語教科書」の記述内容の変遷、およびその教育的、文化的な役割を再検討する。さらに、近年の中央教育部における教育改革に伴う民族教科書の変遷に係る記述内容の全体像を明白にし、民族教科書の編纂による今後の課題についての再検討を行う。

つまり、本論では特に次の２点に焦点を当てる。まず、民族学校、義務教育全段における「モンゴル語教科書」を比較分析する。次に、当該の「教員用参考書」による各授業の学習目標に基づき、「モンゴル教科書」における教育的な役割につて考察する。この「教員用参考書」は、学校教育において、教師たちの教学活動の全般をコントロールしているものでもある。そこで、「教員用参考」による学習目標を基準にして、当該授業における教育的な役割を明白にすることが十分考えられる。このような、本論では「教員用参考書」による学習目標を基準に、教科書の教育的な役割について考察し、各教育的な役割の教科書内容全体に占める割合について比較分析することが本論の研究意義の一つである。なぜならば、先行研究はほとんど教科書の記述内容と「課程標準」の分析、考察に留まっていることが指摘できる。

本論においては、主に文献調査法と教科書内容、およびその教育的、文化的な役割について、各カテゴリーに分類しながら、統計の手法を用いた量的研究方法と実際の記述内容によ

る質的研究方法を併用するものである。

まず、民族学校における民族教科書に関連する文献資料、および既存研究を可能な範囲で収集する。また、近代民族学校による初期民族教科書の特徴とその教育的、文化的な役割を明白にするとともに、これまでの民族教育に関する先行研究の特徴とその課題を提示する。

また、中国教育部または内モンゴル教育庁の教育政策に関するデータベースを用いて、民族教科書改革に関する政策や法規をまとめるとともに、その政策の変遷による民族教科書編纂の変化を明らかにする。

そして、本論の分析対象である民族学校における義務教育段階用の「モンゴル語教科書」、当該「教員用参考書」、および「モンゴル語課程標準」を収集するとともに、その記述内容を分析、考察する。そこで、教科書の記述内容、およびその教育的、文化的な役割について、統計の手法を用いた量的研究および実際の記述内容による質的研究を通じて、本論における研究設問の解説、すなわち、本論の研究目的を達成させることに努める。

【論文の概要】

各章の内容は、以下の通りである。

序章では本論の背景、研究目的とその方法、ならびに構成について述べた。民族教育に関しては教育経費、言語教育政策、そしてアイデンティティ教育をめぐる研究蓄積が多くみられる。教科書は国民形成、人間形成による極めて重要な役割を果たしているため、多民族国家である中国においては、長年これら民族教科書をめぐる教育改革が大きな課題となっている。そこで、本論では、民族学校の義務教育全段における教科書の教育的で文化的な役割を探り、民族教科書本来の目的にそった教科書の記述内容を分析することを第一の命題として設定した。

第一章では中国・内モンゴルにおける学校教育体制や民族教育の概説とその位置づけを整理し、民族教育における先行研究の現状とその方向性を検討した上で、今後の課題を提示した。内モンゴルにおける民族教育に関する先行研究では、教育経費の分配、民族教育政策の立法方案、言語教育政策、そしてアイデンティティ教育をめぐる研究が多く、民族教科書に関する研究はまだ十分になされていない。一方で、民族教科書を分析した先行研究においては、義務教育全段用の教科書を対象とした研究が見られなく、その分析内容や研究方法にも限界がある。また、各教科書における「教員用参考書」について分析と考察した研究が見られないのも現状である。そして、民族教科書の教育的役割について、ほとんどマイノリティ教育とマジョリテイ教育的な視点から論じたものである。そのため、民族学校における教科書研究では、まずは分析対象とした義務教育段階用の教科書を系統的に分析し、その教育的、または文化的な役割についてグローバル化、国際化に対応し得る多文化教育の視点に帰着させて設定することが重要であるとの結論を提示した。

第二章では民族教科書の発展経緯を明らかにし、民族教科書と民族教科書制度の歴史的な源流とその発展経路の整理を行った。その上で、民族教科書と各時代の社会における位置

づけ、またその役割についても独自の調査を行い、事実の究明を果たした。その結果、中華民国、および満州国における民族教育には、当時のモンゴル王公や知識人階級の人々のモンゴル地域・社会の発展を呼びかけるための文化的で政治的な目的が高かったことが判明した。しかしながら、当時はこのような呼びかけが、社会や政治状況によって、支配勢力や政府から大きく制約されていたことも同時に確認することができた。

この点から、当時の民族教育および民族教科書における、民族文化を宣伝、継承するという教育的な役割には、当時の支配勢力による政治的な意向が強く反映されていることが明らかになった。さらに、新中国(1949)の成立当初、教科書編纂については「国定制」が実施され、教育を通じて各民族における国民性を養成することが図られていたものの、その後の教育改革によって児童生徒の総合資質や能力の育成が図られると、教科書制度もまた「国定制」から「検定制」へと改革された。この教科書の「検定制」によって、各民族地域の文化的な特徴に応じた教科書の編纂が可能となることは予測されるものであった。そこで、実際の教科書内容にはどのような変遷をもたらし、また、その変遷がどのような教育的で文化的な役割を果たし得たかについて、実際の教科書内容をさらに詳細に分析、考察することが必要であるとの結論を導き出した。

第三章では新中国における民族教科書制度の変遷、およびその発展について整理と分析を試みた。新中国成立以来、内モンゴルにおける民族教科書と教科書編纂制度の歴史的な発展経緯は、建国初期の「国定制」(1950～1986)から改革開放期による「検定制」(1986～)への改革、そして、現在、多文化の発展、情報化の進化、さらなるグローバル化世界による経済高度成長などが大きく影響を与えることとなった点に着目した。またこれによって、国家との一体感や国民性の育成が、これまでよりも一層強く求められるようになっていった。これに関しては、民族学校における「国家統編教材」の使用が義務化された以後に編纂・刊行された教科書の記述内容について詳細に調査と分析を行う必要であるとの結論を導き出した。

第四章では先行研究における教科書研究理論、およびその分析方法を概観するとともに、本論における具体的な分析方法について説明を行った。その上で、本論による分析方法の正当性について論じるだけでなく、その分析方法の正当性と限界についても言及した。

尚、本論文においては、教科書研究による「教科内容研究」方法を用いた。まずこの「教科内容研究」とは、一般的には、研究や調査対象に関する内容を分析することをいう。つまり、各教科書には、どのような内容が記述されているのか、という記述内容に関する研究である。すなわち、本論では「教科内容研究」によって民族学校、義務教育段階用の教科書にはどのような内容が記述され、その内容には、どのような知識や文化が盛り込まれ、また、その記述内容がどのように変遷し、そしてどのような教育的な役割を果たしているのかを明確化にすることを第一の目的とした。

第五章では、民族学校、義務教育段階用の教科書による比較分析と考察を通して、民族教科書の記述内容の変遷とその教育的で文化的な役割というものを明確化することを図っ

た。民族学校義務教育全段を、小学校段階(小学校 1～6 学年)と初級中学校(初級中学校 1～3 学年)の二段階に分けながら、各段階の教科書内容の記述内容およびその記述内容による教育的な役割について比較分析と考察を行った。

第六章では、本論の分析対象として民族教科書の編纂基準とした「課程標準」および学校現場で教師たちの教学活動で使用すべきである「教員用参考書」の記述内容について分析と考察を行った。具体的には、この「課程標準」と「教員用参考書」の記述内容について、各学年・学習段階における学習内容・目標、教学の重点、および教学に関する留意点に焦点を当てて分析した上で、教科書と「課程標準」、そして「教員用参考書」の 3 項目の関連性と相互作用について検討を行った。

本章の調査と考察によって、まず、民族学校、義務教育段階用の教科書による学習資質や能力の育成については、初等教育段階では、児童たちの語学力による基礎知識を身に付けることを重視することをはじめ、学習意欲、興味関心を養成することを目的としつつ、初級中等教育段階においては、生徒たち自身による問題発見と、その問題を解決する主体的な学習能力の育成と向上までが重視されていることが判明した。

次に、「課程標準」においては、民族教科書における教育的な役割として、民族性や国民性、および多文化教育に関する教育的な役割をも果たすべき内容として推奨されていることが判明した。しかしながら、第五章を通じて、実際の教科書内容では、多文化教育に関する内容の記述はほとんど見られないことが明らかになった。

終章では、本論の各章のまとめ、および本論で明らかになったこと、さらに民族教科書編纂における今後の課題を提示した。

具体的には、本論では、民族教科書問題を、記述内容の変遷と教育的な役割に帰着させながら検討を行ってきたが、今後は、これら民族教科書の記述内容や叙述の構造、教学内容の難易度などの問題を、学校教育の中心である児童生徒の視点に帰着させ、「児童生徒の認識発展」という観点から、学習過程に関連づけて分析し考察していくことも必要であろうと考える。

また、本論においては、教科書、「課程標準」、そして「教員用参考書」の３項目に関する分析と考察に留まっており、今後の調査においては、教科書編集者や出版社、学校現場の教師や教育者、何より教育の主体である児童生徒たちとも連携し、学校現場での半構造化インタビュー調査などを通じて、民族教科書における現状とその課題について再検討することが必要不可欠であることも考える。

【まとめ】

本論を通じて、民族学校、義務教育全段における「2020 年度改革前」と「2021 年度改革後」用の「モンゴル語教科書」による教育的な役割に関する全体的な傾向を、以下の点にまとめられる。

まず、「モンゴル語教科書」の民族教育的な役割に関する内容の記述状況については、

「2020 年度改革前」から「2021 年度改革後」によって、教科書内容全体に占める割合は下がっているものの、国民としての意識形態の形成に関する国民教育的な役割がより一層強化されたことを調査の結果、判明した。これらのことから、近年、中央教育部の民族学校における教科書改革によって、民族教科書における民族教育的な役割に関連する記述内容が減っている一方で、国民性の養成、国民教育的な役割に関連する記述内容が増えていることが結論づけられた。

次に、民族学校、初等教育段階における「モンゴル語教科書」の「2020 年度改革前」用によっても、「2021 年度改革後」用によっても、教科書内容全体に占める割合はもっとも多いのは道徳意識教育に関する内容の記述であり、その一方で、初級中等教育段階によっては、生徒たちの総合的な学習資質や能力の向上に関する内容の記述がもっとも多くなったことが明白となった。これらのことから、「2020 年度改革前」によっても、「2021 年度改革後」によっても、初等教育段階においては、児童たちの道徳意識教育の育成こそが、最も重要視される学習目標として働いている一方で、初級中等教育段階によっては、児童たちの総合的な学習資質や能力の向上が最も重要視される学習目標として働いていることが明らかになった。

そして、最後に、「2020 年度改革前」によっても、「2021 年度改革後」によっても、教科書内容全体においては、グローバル化社会や国際化における文化の多様性に応じた多文化教育に関する内容はほとんど記述されてないことが確認できる。ここから、「2020 年度改革前」の教科書によっても、「2021 年度改革後」の教科書によっても、現代社会のグローバル化に応じた多文化教育的な役割は到底果たすことができていないとの結論に至った。さらに、ここから、2013 年版の「モンゴル語課程標準」は、義務教育全段による「モンゴル語教科書」においては、十分に機能していないことも指摘できた。

【今後の課題】

まず、本論で取り上げた「モンゴル語教科書」は、近年の中央教育部による「国家統編教材」の義務化の直前後、あるいは初期段階において編纂や刊行されたものである。そのため、民族学校における「国家統編教材」の使用が義務化された現在、「モンゴル語教科書」の記述内容について追究しつつ、「道徳与法治」、「地理」、「歴史」など、他の教育科目における教科書も研究視野に入れ、民族教育による教科書や教材の全体像を把握することが必要であろうと考える。

次に、本論においては、「モンゴル語教科書」、「モンゴル語課程標準」、「教員用参考書」などの書籍資料に関する分析に留まっており、今後の調査においては、教科書編集者や出版社、学校現場の教師や教育者、何より教育の主体である児童生徒たちとも連携し、学校現場での半構造化インタビュー調査などを通じて、民族教科書における現状と課題を再検討することが必要不可欠であると考える。